

貿易業を軌道に乗せた岩太郎でしたが男児に恵まれず、1924年（大正13年）岐阜から大西保一を迎えます。15歳の保一は将来養子となって毛利商店を継ぐべく、パルモア学院で英語を学び、貿易業に取り組みます。取扱品も七宝焼だけでなく神戸薩摩や真珠など欧米人が好む日本製品全般となり、それらをシンガポールに輸出するという事業になっていました。1931年（昭和6年）保一はシンガポールのBATTERY ROAD「NIKKO HOUS 10」を拠点に日本とシンガポールを行き来する生活となります。現存する当時のデミタスカップの裏には「NIKKO」という銘が入っており、当時をしのばせます。



「NIKKO」の銘



シンガポールのようす

1932年（昭和7年）保一は正式に養子になりましたが、その二年後に岩太郎が死去します。一人では神戸とシンガポール二つの拠点を持つ商売は継続できない、そこで名古屋から岩太郎の甥・巖が経営に加わります。保一と巖は年も近く、二人三脚の経営をはじめます。しかし1933年（昭和8年）シンガポールの取引先が経営に行きづまり、保一はやむなくそ

の会社を買収、そのままシンガポールに住むことになります。シンガポールでの生活も5年がすぎた1939年（昭和14年）、保一は名古屋の親戚からきぬを嫁に迎えることとなります。きぬは二週間に及ぶ慣れない船旅の末シンガポールに到着、二人は現地で結婚式を挙げます。きぬは生活のために現地の言葉・マライ語も徐々に覚え、異国の地で力を合わせて生活し子供にも恵まれました。



保一ときぬの結婚式